

入学最初の日，あるいは初年次教育の役割

菊池重雄

玉川大学

かれこれ20年ほど前のことである。アメリカ合衆国の初年次教育についてあれこれ調べていたとき、初年次教育のコース・プログラムの中にサローヤン (William Saroyan 1908-1981) の『入学最初の日 (The First Day of School)』をテキストのひとつとして選定している大学が複数あることに気づいた。わたしは必ずしもサローヤンの良き読者ではなかったが、彼の小説については、それなりの読書経験と知識をもちあわせていた。だから『入学最初の日』がテキストとして選ばれていることに、自分のこれまでの研究の盲点を指摘された思いだった。

『入学最初の日』は、小学校に入学したばかりの少年、ジム・デヴィが、小学校一年生になるために何を必要としているかということをごく平易な文体で綴った短編小説である。そこにはABCの基礎が出てくるわけでもなければ、足し算や引き算が出てくるわけでもない。友だちや先生を中心とするジムを取り巻く人々のことと、そこでの彼の立ち位置が描かれているだけである。それにもかかわらず、この短編を読むと、読者は幼児から児童への移行期をどのように乗り越えたらよいかを知ることができる。それだけではない。ここに書かれていることは、その後の移行期においても十分に有効であると思うに至る。『入学最初の日』は、高校を終えて大学生になるとき、大学を卒業して一市民として働き始めるとき、どのような条件が整っていれば、次のステージにスムーズに移行することができるかを、ストーリーを超えて、読者に示唆してくれるのだ。

幸か不幸か、大学生といえども、多くの者にとって小学校入学時というのはもはや神話の世界である。そうであるならば、大学初年次を人生の起点ととらえてみたい。この時期を起点として意識し、高校時代とのギャップを克服することで、目標とする将来の到達地点までの軌跡を正しく描くことができなだろうか。目標に到達するためには、めざすところだけを見つめていけばよいわけではない。起点をふまえて進むことが大切である。よく使われる手漕ぎボートのたとえがこの場合もあてはまるかもしれない。手漕ぎボートで目標とする地点に向かうとき、漕ぎ手は目当てとする場所にたいしては背中を向け、その視線は起点を見据える。ときどき振り返って目的地を確認するが、視線の大半は起点の確認と途中の景色(プロセス)を楽しむことに費やされる。それがボートの漕ぎ方だ。

初年次教育は、市民生活という長い航海に乗り出す学生にとって大学卒業だけではなく、人生そのものの目標とするところへ向かうさいの起点である。ひとりの教員・研究者として学生たちの大学入学の最初の日々を彼ら彼女たちとともに過ごせることはこの上ない幸せであると感じている。

(初年次教育学会会長代行)